

第2回推進会議の発言要旨

【大隅委員長】

- 石井副委員長の意見を受け、教育関係があまり議論されていなかったことを認識。
- 広報やコミュニケーションの強化が必要と感じる。
- デジタルを活用して、仙台市の取り組みを広く浸透させる方法を検討すべきと考える。

【石井副委員長】

- 前回の委員の意見がうまく反映されており、市としての強い意気込みを感じる。
- 市民が共感することが重要であり、自発的に取り組む人材を育てる必要があると考える。
- 教育が非常に重要であり、義務教育の中でダイバーシティの考え方を伝えることが重要と提案。
- 子供たちに対する教育を通じて、10年後には社会が変わると考える。
- 市として、ダイバーシティを理解するマインドを育てる姿勢を打ち出し、実行することが重要と提案。
- データの見える化に加え、それを象徴するような「場」を作ることが重要だと提案。
- 市庁舎やメディアテークなどの場所を、ダイバーシティを感じられる空間にすることが大切。
- メディアテークは25年前にバリアフリーの視点で作られたが、ダイバーシティの新しい概念を取り入れてリニューアルすることが望ましいと考える。
- 仙台を象徴する場として、メディアテークをうまく活用していくべきだと提案。

【宇田川委員】

- 既存の計画に順次取り入れる流れが現実的で良いと感じた。
- 計画が変更される前の段階でも、個別施策に指針の視点を取り入れるべきと感じた。
- 「世界に通じるダイバーシティ」という表現に違和感を覚えた。
- 「世界に追いつく」というニュアンスが含まれている可能性を懸念。
- 仙台市は世界をリードする、高い意気込みを持って指針を作るべきだと提案。
- 「仙台らしいダイバーシティ」を自信を持って打ち出すべきだと提案。
- 「世界的な議論の動向」という表現も慎重に検討すべきと感じた。
- 指針の中での記載方法を工夫すべきと提案。
- 「世界」という言葉に対する定義が曖昧で、G7やOECD諸国のみを指している可能性を懸念。
- 世界の議論として一部の国に焦点を当てることに慎重になるべきと提案。
- マジョリティがダイバーシティについて十分に理解していないと感じる。
- コミュニティづくりや交流の場を設けることで、個々の理解を深めることが重要だと提案。
- 既存のデータには限界があり、新たな視点を持つことが重要と指摘。
- 自動翻訳ツールなどの技術を活用して、言語の壁を低くする取り組みを進めるべきと提案。
- デジタル化に対応できない人々への配慮も重要だと考える。
- 働き方改革において、個々のニーズに合わせたきめ細やかな対応が必要だと提案。

- アートを活用した取り組みがまちの魅力や安全性を高める可能性を指摘。
- 若者の地元定着を促すため、企業の活性化が重要だと考える。
- 世界的な動向を記載する際には、表現に注意が必要であると補足。

【及川委員】

- 世界に関する議論に共感するが、日本は世界から遅れていることも事実。
- 仙台らしさを考えながら取り組むことが重要。
- 「ちがいへの理解」と「ちがいの尊重」が重要なポイントと考える。
- これらがなければ、制度や政策は作れない。
- 市民全体で取り組むものにしたという仙台市の考えを支持。
- ちがいを生かすための理解と尊重が重要。
- 制度策定を最初にするのではなく、まずは市民が理解するという順で、視点2：なくてはならない「ちがい」を守る(①「ちがい」への理解 ②ちがいへの尊重) → 視点1:「ちがい」に配慮のある制度・サービスをつくる」と順番を変えることで、理解がしやすくなるかもしれないと提案。
- 行政が取り組むためには、細かく網羅された内容が必要だと理解する。
- ビジネスセクターの視点から、整理された優先順位を設定することが重要だと考える。
- ダイバーシティの優先順位を明確にすることで、効果的な広報戦略に繋がると提案。
- 豊岡市のジェンダーダイバーシティのブランディングを例に挙げ、仙台もリーダーシップを取るべきだと提案。
- ビジネスセクターの役割を明確にし、地元企業が連携して動く仕組みを作るべきと考える。
- 仙台市とビジネスセクターが連携して、外国人採用や若者の就労支援を推進するべきと提案。
- 優先順位を決める際、見える化が重要だと考える。
- 企業で行われているように、賃金格差や若者の流出率などの見える化が効果的だと提案。
- 見える化する項目を決めることで、まちが何を重視しているかが明確になると考える。
- ホワイトペーパーの作成やベンチャー企業の割合などを見える化し、現状を把握することが大切だと提案。

【小野委員】

- 前回の議論を受け、当事者が関わる視点が盛り込まれたことに感謝。
- マイナスをゼロにすることや、ちがいに配慮することが日本の現状と認識。
- 人々の理解が深まれば、行動や価値観が変わり、それがまちの発展に繋がると考える。
- マイノリティとの関わりが深まれば、理解が深まり、行動が変わると提案。
- 「関係人口」のように、マイノリティとの関わりがまちの成長に寄与すると考える。
- ちがいを尊重することが、世界に誇れるまちづくりに繋がると提案。
- 「ちがいに配慮する」という表現より、「ちがいが輝く」などのポジティブな表現を用いるべきと提案。
- ちがっているからこそ才能が発揮される場所が必要

【小林委員】

- マイナスをゼロにする動きは重要だが、それをプラスに変えてまちの力にすることが重要と考える。
- ダイバーシティは当たり前であるべきで、仙台がそれを活用して成長することが重要。
- 「視点3」の掛け合わせについて、文言が曖昧に感じる。
- 新しい産業を生み出すことや、グローバルなスタートアップ企業を作ることが重要だと提案。
- 今いる人々の不便を解消する視点が多いが、海外の人々を呼び込む視点も必要だと考える。
- 仙台を「住みたいまち」にすることが重要だと考える。
- 仙台には全国から優秀な学生が集まるが、就職先が少なく、多くが県外に出てしまう現状を指摘。
- 仙台に魅力的な企業や産業が少ないことが、若者が仙台に留まらない理由だと考える。
- 若者が働きたいと思えるような企業や産業を仙台に作ることで、ダイバーシティの推進に繋がると提案。

【小宮委員】

- まちの未来像を最初に考えるべき。
- 人口減少や百貨店の減少など、仙台の将来を見据えた視点が必要。
- 仙台が企業や人にとって魅力的な場所になる方法を考えることが大切。
- まちの魅力をどう高めるかを描き、そのために必要な施策を検討するべき。
- まちをどう魅力的にするかが「ちがひ」を理解する鍵となる。

【田村委員】

- 仙台のまちづくりとダイバーシティの推進は非常に重要だと感じた。
- ダイバーシティ推進指針が2031年度以降に消えるのではないかと懸念。
- 指針の進捗状況や課題を継続的に確認する仕組みが必要だと提案。
- 国連のSDGsに関連して、2030年以降の計画についても懸念。
- 世界的な議論の動向を反映することが必要だと感じた。
- OECDやG7だけでなく、国際社会全体の議論を考慮すべき。
- 国際社会での議論を仙台市の指針に取り入れるべきと提案。
- 阪急電鉄のキャッチフレーズ「未来にわたり住みたいまち」を例に挙げ、仙台も「住みたいまち」を目指すべきと考える。
- ダイバーシティの議論において、居心地の良さや参加意欲を高める「居場所」の重要性を指摘。
- 留学生が仙台に魅力を感じるためには、仙台のイメージを考慮する必要があると提案。
- 豊岡市がジェンダーギャップ解消を目指したのは、20代女性の流出が激しかったためであり、仙台も課題を統計で把握することが重要と考える。
- 仙台が国内の競争に巻き込まれるのではなく、海外に目を向けることが必要だと提案。
- 愛着を持つまちづくりの重要性を強調し、住民がまちをケアすることが仙台らしいダイバ

ーシティの推進に繋がると考える。

【ビッティ委員】

- 「世界に通じるダイバーシティ」の視点が難しそうに感じる。
- 世界各国はダイバーシティに対する対応が異なる。
- 仙台らしいダイバーシティを重視すべき。
- 仙台市のアイデンティティを保ちながら、オリジナルなダイバーシティを構築することが重要。
- ダイバーシティを守ることが最終的な目的になるべき。
- 仙台市は歴史的に国際化が進んでおり、ダイバーシティを重視することが重要。
- 東日本大震災を経て、国際的な支援を受けたことで、仙台市はさらに国際化した。
- 多文化共生において、宗教や食文化への配慮が重要。
- 外国人向けのイベントや情報提供を強化すべき。
- AIの導入による翻訳や通訳の効率化が重要だが、最終チェックは人間が行うべき。
- ゴミ分別の案内など、多言語表記を改善する必要がある。
- 仙台市はすでに住みやすいが、さらなる改善の余地がある。
- 仙台は住みやすく、仙台の方々が外国の方に対して優しく、物価も安く、電車などに乗らなくても自転車ですべてどこでも行ける点が、海外から見ると非常に魅力的。
- 留学生を増やすことが仙台の発展に重要で、留学観光のような形で海外からの学生を呼び込むべきだと提案。
- ダイバーシティについて、日本国内での理解が不足していると感じる。
- 日本のメディアが外国人に対して偏見を助長するような報道をしていると指摘。
- 観光において外国人観光客に対する不公平な料金設定が問題視されているが、仙台市でもその問題が発生しないように対応すべきだと考える。

【福田委員】

- 仙台らしさを強調した指針を作ってほしいと考えている。
- 「世界に通じる」という言葉に違和感を覚えた。
- 仙台らしい、尖った指針を作ることが多様性を生み出すまちづくりに繋がると考える。
- 及川委員の意見に共感し、行政よりも民間の方が早く動ける部分があると考え。
- 「視点4」を最初に考え、次に「ちがいを守る」、その後「まちの力に変える」という順番が良いのではないかと提案。
- 行政は「制度・サービス」でフォローアップする形が良いと考える。
- 仙台の歴史文化都市としての個性を尊重することが非常に重要だと感じる。
- 指針が網羅的である一方、仙台らしさや独自性が感じられない点に懸念を抱く。
- 国の施策や国際的な動きを慎重に見定める必要があると考える。
- 働き方に関する議論で、国の規制が必ずしも良い結果を生むとは限らないと指摘。
- 日本の歴史や仙台の強みを活かして、ダイバーシティ指針を作るべきだと提案。

【本図委員】

- グローバルスタンダードをリードするニュアンスを強調すべきだと考える。
- このダイバーシティの議論から、世界にむけて、公共善の創出を提示していくべき。
- 令和の日本型学校教育に関連する議論においても、内向きにならないようにすべきと考えている。外部から学ぶ姿が引き続き必要。その上で仙台として誇れるようなものに。
- 推進指針が庁内指針となると、具体性がありつつも範囲が限定される点を懸念する。
- 「ダイバーシティ都市宣言」のような発信力のあるものとしてとりまとめることもご検討いただきたい。
- 「暮らしやすいまち」を具体的にどう実現するかをデータを基に考えるべき。
- ダイバーシティを推進することで、市民にどのようなメリットがあるかを議論する場が必要だと考える。
- 教育においても、探究活動にダイバーシティの視点で改めて捉えることで、子供たちの価値観や学ぶ意欲が育つ。

【マリ委員】

- 世界のダイバーシティについて、まだ考えがまとまっていないが、日本のダイバーシティが遅れているという議論について感じることもある。
- 仙台市が進んでいるイメージを持たれることが重要で、それがダイバーシティに繋がると考える。
- ダイバーシティは多くの枠を持つ概念で、理解が難しいと感じる部分がある。
- 仙台市が「誰でも暮らしやすいまち」を目指すことで、ダイバーシティを包括できるのではないかと考える。
- ダイバーシティを推進するために、条例や支援制度の導入が必要と感じる。
- 教育や行政の具体的な施策にダイバーシティの視点を取り入れるべきだと提案。